

Title	ハイデガーにおける現存在の「身体性」の問題性格について
Sub Title	The problematic character of Dasein's "bodily nature" in Heidegger
Author	伊藤, 良司(Ito, Ryoji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2009
Jtitle	哲學 No.122 (2009. 3) ,p.45- 65
JaLC DOI	
Abstract	<p>In Being and Time, Heidegger says that Dasein's "bodily nature" (Leiblichkeit) implies "a whole problematic of its own", adding "we shall not treat it here". I will inquire into why Dasein's bodily nature was problematic for him. He hadn't given us any explicit answers to this question. However, in some of his texts (Metaphysische Anfangsgründe der Logik and Zollikoner Seminare), we can find some clues about it. By following these texts, I will try to reveal that Heidegger is implicitly giving Dasein's bodily nature a double position in his analysis of Dasein: one is that Dasein's bodily nature is based on "in-the-world-being", the other is that it has "neutral" Dasein diversified.</p> <p>So I argue that this double position makes Heidegger's "bodily nature" problematic. In addition, I will confirm this double position of Dasein's bodily nature, in a manner different from his, by describing the bodily situation, which Heidegger himself illustrates in Zollikoner Seminare. He pays much attention to the fact that we are often absorbed in thinking about something while walking around. I will point out that this "while ing" includes both positions of Dasein's bodily nature: walking around itself is based on "in-the-world-being" of Dasein, while we find out where we are in the world through our relation to each of the ready-to-hand (das Zuhandene) in our walking around.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000122-0045

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

ハイデガーにおける現存在の 「身体性」の問題性格について

伊 藤 良 司*

The problematic character of Dasein's “bodily nature” in Heidegger

Ryoji Ito

In *Being and Time*, Heidegger says that Dasein's “bodily nature” (Leiblichkeit) implies “a whole problematic of its own”, adding “we shall not treat it here”. I will inquire into why Dasein's bodily nature was problematic for him. He hadn't given us any explicit answers to this question. However, in some of his texts (*Metaphysische Anfangsgründe der Logik* and *Zollikoner Seminare*), we can find some clues about it. By following these texts, I will try to reveal that Heidegger is implicitly giving Dasein's bodily nature a double potision in his analysis of Dasein: one is that Dasein's bodily nature is based on “in-the-world-being”, the other is that it has “neutral” Dasein diversified.

So I argue that this double potision makes Heidegger's “bodily nature” problematic. In addition, I will comfirm this double potision of Dasein's bodily nature, in a manner different from his, by describing the bodily situation, which Heidegger himself illustrates in *Zollikoner Seminare*. He pays much attention to the fact that we are offen absorbed in thinking about something while walking around. I will point out that this “while ~ing” includes both potisions of Dasein's bodily nature: walking around

* 文学研究科哲学・倫理学専攻（哲学分野）後期博士課程3年

ハイデガーにおける現存在の「身体性」の問題性格について

itself is based on “in-the-world-being” of Dasein, while we find out where we are in the world through our relation to each of the ready-to-hand (das Zuhandene) in our walking around.

序

現存在は、その諸々の距離を-除くこと (Ent-fernung) と同様に、これらの方向〔上下左右前後など〕をも絶えず携えている (mitnehmen). 自らの「身体性」における現存在の空間化 (die Verräumlichung des Daseins in seiner 《Leiblichkeit》) は、ここでは取り扱うことのできない独自の問題性をうちに含んでいるけれども、これらの方向という点でも顕著な特徴を備えている。[SuZ, S. 108]

『存在と時間』(1927)においてハイデガーが「身体性」に直接言及しているのはわずかこれだけである。しかし、ここで述べられているように、彼にとって「身体性」はどうしてもよい問題などではなく、同書の中では扱いきれない、「独自の問題性」をもったものだった。事実、晩年のハイデガーはスイス人精神科医メダルト・ボスとの対話(1972年3月3日)の中で、次のように述べている。

ボス [……] サルトルは、あなたが『存在と時間』の中で身体についてたった六行しか書いていないと驚いているのです。

ハイデガー サルトルの非難に対して私がおはつきり言えることは、身体性はこの上なく困難な問題で、当時はまだあれ以上のことが言えなかったということだけです。[ZS, S. 292]

ハイデガーにとって「身体性」はなぜ「困難な問題」だったのか。彼はやはりボスとの対話で、それは第一に身体現象は現存在の「世界-内-存

在」という根本特徴を十分に解明した上でなければ取り扱えなかったためであり、第二に「世界-内-存在」ということからみた身体現象の記述が当時見当たらなかったためだと語っている[ZS, S. 202]. だが、これだけでは「身体性」の「独自の問題性」が何だったのかは謎のままである。

そこで本稿では、この「身体性」の「独自の問題性」を見定めるため、「身体性」という語が際立って登場する『存在と時間』[SuZ], 『論理学の形而上学的な始元諸根拠』[GA26]の第10節, 『ツォリコーン・ゼミナール』[ZS]を確認し、そこから読み取れるハイデガーの現存在分析にとっての「身体性」の問題性格を指摘する¹(I). そして、そのような問題性を孕んだ「身体性」が事象的にも確認できることを《ながら》という身体現象の記述から示唆してみたい(II).

I ハイデガーにおける現存在の身体性の位置づけ

～『存在と時間』, 『論理学の形而上学的な始元諸根拠』および『ツォリコーン・ゼミナール』より～

以下、「身体性」をめぐるハイデガーの考察を拾い上げ、彼にとっての「身体性」の位置づけを俯瞰する。

i) 『存在と時間』: 現存在の世界内での自己定位にかかわる「身体性」

「身体性」という語が登場する先の引用は『存在と時間』の第23節「世界-内-存在の空間性」[SuZ, S. 104-110]の中にある。その節を含む第22節から第24節にかけての議論は、「世界-内-存在(In-der-Welt-sein)」という根本体制をもつ現存在が世界の「内に-在る(In-sein)」というときの「空間性(Räumlichkeit)」の解明に向けられたものであり、そのことから「身体性」が現存在の空間論の一環として扱われてたことがうかがえる。では、現存在の空間論の中で「身体性」はどのように位置づけられるのか。

前掲箇所からは「空間性」の次のような区分が読み取れる。(1)客体的(vorhanden)な世界の空間性としての「間隔(Abstand)」, (2)用具的(zuhanden)な世界(「環世界(Umwelt)」)の空間性としての「環性(das Umhafte)」, (3)現存在の空間性としての「空けること(Einräumen)」, (4)「同質的な自然空間」。このうち、「身体性」は(3)に関係するが、それ以外も含めて簡単に紹介しておく。

まず、ハイデガーは現存在が世界の「内に在る」とは、何か「空間容器(Raumgefäß)」のようなものの中に現存在が客体的に入っていることではないと再三強調している[SuZ, §12, S. 101]。彼が「内部性(Inwendigkeit)」[SuZ, S. 101]と呼んで退けた容器と中身のような関係はどちらも客体的なものであることが既に前提されており[ebd.]、両者は測定可能な「間隔(Abstand)」[SuZ, S. 105]をもって一方が他方に収納されることとなる。現存在は客体的な事物ではなく、それゆえその空間性も「間隔」のような空間性ではない。

しかし、かといって現存在が非空間的であるのではないとハイデガーは続ける。既に第14節から第18節において「世界-内-存在」における「世界」として見定められた用具的な世界、つまり「環世界(Umwelt)」²には既に空間的意味合いをもつ「…のまわりに(um)」ということが含まれている。ハイデガーはこの「環性(das Umhafte)」を、用具的なものが既に備えている「場所(Plätze)」と「方面(Gegend)」だと述べる。もちろん、それらは客体的な意味での空間位置と方向ではない。彼によれば、「場所」とは、例えば「道具」のような個々の用具的なものが、その「…のために(zu…)」に応じて他のものとの連関の中で配当されることとあり、その連関全体の中で当てられている各々の「適所性(Hingehörigkeit)〔所属性、適当性〕」[SuZ, S. 102]のことである(例えば、ハンマーや釘はその《椅子を作るため》の連関の中で各々の「場所」を割り当てられると言えよう)。また、そうした「場所」の割り当てが可

能となるためには、予め個々の用具的なものが「どこへ (Wohin)」向けられているのかが見通されていなければならない。それゆえ、「配視的に見通しのきく道具全体性の中で、諸々の場所を配置したり見つけたりすることが可能になるには、そのまえになにか方面 (Gegend) といったものが発見されていなければならない」[SuZ, S. 103].

だが、現存在はどうしてこうした空間性を備えた用具的なものに出会うことが可能なのか。ハイデガーは、それは現存在自身がその「世界-内-存在」という点からみて空間的であるからだと答える [SuZ, S. 104]. では、現存在の空間性とは何か。ハイデガーによれば、そもそも「用具性 (Zuhandenheit)」という語からして既に「手元に [ある] (zur Hand)」という意味合いが含まれており、それは用具的なものの我々にとっての「近さ (Nähe)」を示唆している [SuZ, S. 102]. つまり、用具的なものの「場所」とは単に相互間の関係であるだけでなく、それをを用いる我々に対する「近さ」や「遠さ」(両者はまとめて「遠隔性 Entferntheit」とされる [SuZ, S. 105]) でもある。もちろん、それは或る道具と我々間の「間隔」に物差しをあてて測られるようなものではなく³、用具的なものを使用する我々の配慮的交渉⁴によって規定されている [SuZ, S. 102]. このように、用具的なものの「場所」を可能ならしめる現存在の空間性格をハイデガーは「距離を-除くこと Ent-fernung」と名づける。それは、用具的なものの「遠隔性」を「取り去ること (Verschwindenmachen)」であり、それによってそのものを自らに「配視的に近づけること (Näherung)」である [SuZ, S. 105]. ただし、いくら「距離を-除く」といっても、用具的なものと現存在自身との距離を完全に消失させることはできない⁵。なぜなら、「現存在は、配視的に空間を発見するという仕方である空間的であり、しかも、現存在がそのように空間的に出会っている存在者に絶えず距離を除きつつ (entfernend) 関わっているようにして、空間的である」[SuZ, S. 108]からだ。こうして、現存在はその「距離を-除くこと」において、用

具的なものを自らに絶えず「近づける」ことで、自らが空間的であることも発見するのである。

さらに、現存在はその「距離を-除くこと」にあたり、予め既に用具的なものを何らかの「方面」へと方向づけてもいる。ハイデガーはこうした現存在の空間的あり方を「布置 Ausrichtung」と呼ぶ[SuZ, S. 105]。用具的なものは、現存在によって予めその「方面」を「布置」されており、そのように「布置」された「方面」から近づいてくることによって、それが適当とされる「場所」が見出される[SuZ, S. 108]。つまり、現存在の空間性とは、その配慮的交渉において「布置しつつ距離を-除くこと (ausrichtendes Ent-fernen)」[ebd.]である。さらにこうした現存在の空間性はまとめて「空けること Einräumen」と呼ばれる[SuZ, S. 111]。なお、ハイデガーは現存在の空間性を見定めた上で、それに基礎づけられて「同質的な自然空間 (der homogene Naturraum)」が可能となることを示す[SuZ, §24]が、その議論は本稿の主題である「身体性」の問題とはかかわらないので省略する⁶。

以上で、『存在と時間』における現存在の空間論は概観された。「身体性」はその中で「布置」にかかわるものとして挙げられている。そして、本稿冒頭の引用から読み取れるのは、第一に、現存在はその「布置」によって、諸々の用具的なものの「方面」だけではなく、それらに対する自らの方向（上下左右前後など）も定めていること、第二に、現存在は「身体性」をもっており、その「身体性」において自らを空間化するという仕方では現存在は自らを世界内に「布置」している（方向づけている）ということである。

またハイデガーは、「身体性」が用具的なものの「布置」に関与する例として、「手袋」を挙げている。手袋がその左右を定められて「布置」されているのは、それが両手の運動に参加している (mitmachen) からだとされる[SuZ, S. 108]。しかも、こうした左右の別は決して「主観的なも

の」、つまり主観によって感じ分けられるものではなく、「[手袋などが]左右に布置されているということは、現存在一般の本質的な布置に根拠づけられており、この布置はまた、本質上、世界-内-存在からも規定されているのである」[SuZ, S. 109f.]。この例に従えば、手袋に左右の別を定める「現存在一般の本質的な布置」はさしあたり、「身体性」における現存在の自己定位だと言える。なぜなら、手袋に左右の別を定める我々の両手の運動は存在者としての我々の身体の運動の一つであり、この存在者としての身体を身体たらしめているのが現存在の存在性格の一つである「身体性」であるからだ。ただし、ハイデガーは「身体性」が常に用具的なものの「布置」にかかわるわけではないとも言う。例えばハンマーのような場合には、確かにそれは手で持って手と一緒に動かされはするが、手に固有な運動に参加していないため、左右の別はないとされる [SuZ, S. 108f.]。したがって、彼が、用具的なものの「布置」と、「身体性」における現存在自身の「布置」とを区別し、後者を「現存在一般の本質的な布置」として存在論的に先行させていることが読み取れる。

現存在がどのように「身体性」において自らを「布置」するのかという問題は「独自の問題性」を孕むとして『存在と時間』では扱われなかったことは既述のとおりであるが、ハイデガーが現存在の「身体性」を「世界-内-存在」から規定される「現存在一般の本質的な布置」にかかわる存在性格として位置づけていたことは確認できよう。

ii) 『論理学の形而上学的な始元諸根拠』：現存在の実存の組成化要素である「身体性」

『存在と時間』ではそれ以上語られることのなかった「身体性」という語は、同書出版の翌年 1928 年夏学期の講義で再登場する。その講義録『論理学の形而上学的な始元諸根拠』（以下、『始元諸根拠』）の第 10 節「超越の問題、および存在と時間の問題」[GA26, S. 171-195]では、『存

在と時間』の現存在分析に対するハイデガー自身の自己解釈として12の「導入的命題」が提示され、その第6命題では現存在一般の身体性への「分散(Zerstreuung)」ということが主張されている。

ハイデガーはまず、自らが用いた「現存在」という語の「独特の中立性(Neutralität)」[GA26, S. 172]に注意を促す。つまり、「現存在」は、個々の具体的で事実的な実存者としての「人間」と混同されてはならず、「中立的な現存在(das neutrale Dasein)は、それぞれの実存することから湧き出て、実存を内的に可能にしているところの内的可能性のおそらく原源泉(Urquell)である」[ebd.]。この「中立性」という語を用いることで、ハイデガーは現存在の分析論が個々の事実的な実存者(人間)の諸特徴を抽象化しただけの議論だと誤解されるのを避け、それが徹頭徹尾個々の実存者の実存を可能にする「現存在」という特異な存在の解明に向けられていることを強調している。ハイデガーはこの現存在の中立化を「人間の形而上学的孤立化(die metaphysische Isolierung)」[GA26, S. 172]とも呼び、次のように述べる。「現存在としての最も内的な仕方では孤立化された人間のその形而上学的中立性は、存在的なものからの空虚な抽象、すなわち、あれでもなく-これでもなく(ein Weder-noch)ということではなく、根源(Ursprung)の本来的に具体的なものであり、事実的(faktisch)な分散がまだ-ない(Noch-nicht)ということである」[GA26, S. 173]。

では、中立的な現存在はいかにして個々の実存者たりうるのか。ここで再び「身体性」が登場する。ハイデガーは「現存在一般は、身体性への(in die Leiblichkeit), [...] 事実的な分散(die faktische Zerstreuung)にわたっての内的可能性を宿している」[GA26, S. 173]と述べ、そうした現存在の「身体性」への分散の可能性に支えられて、「現存在は、事実的なものとして(als faktisches)はそれぞれとくに一つの身体の中へ撒き散らされている[...]」と主張する[ebd.]。

ハイデガーがここで「事実的」ということで、“tatsächlich”ではなく、

“faktisch” という語を用いていることに注意せねばならない⁷。すなわち、中立的な現存在の「分散」とは、現存在が個々の客体的な存在者へと対象化されることではなく、現存在が実存論的構造としてその可能性を宿す「多様化 (Vermannigfaltigung)」[ebd.]なのである。

そのことを踏まえると、「中立性」の導入は「現存在」を問題にするにあたっての次の二つの観点を改めて際立たせているように思われる。すなわち、現存在を中立化することでその「世界-内-存在」という存在構造に力点を置く観点と、現存在の多様化ということから現存在の事実性 (Faktizität) に着目する観点である。

ただし、両者は決して切り離されたものではない。ハイデガーは「多様化」の可能性を内に孕むという意味での現存在の多様性が「存在それ自身 (Sein selbst) に属する」[ebd.]ものだと述べる。つまり、現存在は「存在それ自身」の多様性に由来して自らをその「身体性」へと多様化するのである。さらに、ハイデガーは、この多様化にとって「身体性」は「一つの組成化要素 (ein Organisationsfaktor)」だと述べている [ebd.]。すなわち、現存在はその「身体性」へと多様化されるが、その多様化に際して「身体性」それ自身が組成化要素として関与しているのである⁸。だが、ここでもハイデガーはそのように多様化の組成化要素となる「身体性」の内実について触れていない。

iii) 『ツォリコーン・ゼミナール』: 「世界-内-存在」に基礎づけられる「身体性」

最後に、晩年のハイデガーが改めて「身体性」について積極的に語っている『ツォリコーン・ゼミナール』(以下、『ツォリコーン』)を確認しておく。1959年から約十年間、スイス人精神科医メグルト・ボスの招待を受け、ツォリコーンにある彼の自宅で精神科医や精神医学の学生たちとともに実施したゼミナールの中で、ハイデガーは医療に携る参加者たちに向

けて『存在と時間』の諸主題を紹介するとともに、彼の現存在分析の立場から「身体性」について語り出す。

ハイデガーはまず、自らが問題とする「身体性」は、量的測定という方法で自然科学が客体的に対象化する物体 (Körper) の性格を指しているのではなく、現存在としての人間にとっての「身体が身体を生きること (Leiben des Leib)」 [ZS, S. 113, etc.] であると再三強調している。それは「身体であること (Leib-sein)」 [ZS, S. 131], 「身体的である (leiblich sein)」 [ZS, S. 294] とも言い換えられ、あくまで「身体性」は現存在の実存から捉えられている。ならば、現存在の「世界-内-存在」という存在構造から「身体性」はどう位置づけられるのか。そこで、1963年から1972年にかけての、ゼミナールおよびボスとの対話にみられるハイデガーの発言を拾い上げてみよう。

まず、ゼミナールでは『存在と時間』での「身体性」の記述を引用した上でこう述べられている。「人間の現存在は、空間を空けること (Einräumen von Raum) とその身体性における現存在の空間化 (Verräumlichung) との意味で、それ自身、空間的なのです。現存在が空間的であるのは、それが身体的だからではありません。身体性が可能なのは、現存在が空間を空ける (einräumend) という意味で空間的であるからに他なりません」 [ZS, S. 105]。ここでは、現存在の空間性が「空けること」と「その身体性における現存在の空間化」という二つの意味に分けられた上で、前者の方が後者およびに「身体性」それ自身を可能にするとされている⁹。先に確認された『始原諸根拠』における現存在の「中立性」の議論を踏まえば、前者の「空けること」が中立的な現存在の根源的な空間性であり、それに基礎づけられて現存在は「身体性」へと多様化し、「身体性における空間化」が可能となるということであろう。

では、そのように「身体性」を基礎づけている現存在の根源的な空間性とは何か。ハイデガーはボスとの対話の中でハイデガーは次のように語っ

ている。「どんな身体経験においても、現存在分析的な見方からすればいつも、人間的に実存する (menschliches Existieren) という根本体制から、つまり、〈現に-在る〉(Da-sein) としての〈人間で-ある〉(Mensch-sein) から、〈世界の-開け〉(Welt-Offenständigkeit [開かれて立つこと]) の領域を——他動詞的な意味で——実存することとしての〈人間で-ある〉から、出発しなければならないのです」[ZS, S. 292, 〈 〉は引用者]。この「世界の-開け」とは、「そこから、その明るみに照らされて、出会ってくるものの有意義性が人間に話しかけてくる (Zusprechen) ような開け」[ebd.] のことであり、現存在としての人間はこうした「世界の開け」からの語りかけに「聞き取る (vernehmen)」という仕方に関係づけられている [ebd.]。それゆえ、現存在の「身体性」は、こうした世界の有意義性の語りかけを「聞き取る」ことができるという範囲内で可能となる。すなわち、「わたしたちが身体性と呼んでいるものはすべて、[...] 出会ってくるもののさまざまな有意義性を、対象化できず視覚的に見ることのできない仕方でも聞き取ることができること (Vernehmen-können) の領域なのです」[ZS, S. 293]。またこうした発言に先立って既に、ハイデガーは「身体的なもの (das Leibliche) は呼応すること (Entsprechen) に基礎を置いています」[ZS, S. 232] とボスに語っており、現存在の世界との応答構造が、その「身体性」だけでなく、事実的な存在者としての身体まで一貫して貫かれていることを強調している。さらに、『存在と時間』では「その身体性における現存在の空間化」とさしあたり同一視できた現存在自身の世界内での自己定位としての「現存在一般の本質的な布置」もまた、世界からの語りかけに現存在が向いていることを意味しているのであって、「身体性」はそれに基礎づけられて可能となるとされている [ZS, S. 294]。ハイデガーの次の発言はここでの彼の立場を決定づけていると言えよう。「わたしたちは目を持っているから「見る」ことができるのではなく、むしろわたしたちはわたしたちの根本本質からして見る存在であるからこそ

目を持っているのです」[ZS, S. 293].

ただし、ハイデガーが次のようにボスに告げていることにも注意しておきたい。「しかし、〔現存在として実存する〕人間は、その世界の開けから自分に語りかけてくるものへと、それを聞き取るという仕方では本質的に関係づけられていることにおいて、この語りかけてくるものに向かってそれに対する自らのふるまい (Verhalten) でもって呼応するように、つまり応える (antworten) ように要請されているのです。それも、出会ってくるものを自分の保護下におき、その本質が展開するよう可能な限りそれを助けるという仕方では呼応することを要請されているのです」[ZS, S. 292]。ここでは、中立的な現存在の存在構造としての「呼応すること」を実存するにあたって、現存在の「ふるまい」が要請されていることが述べられている。それは逆に言えば、現存在の「ふるまい」がなければ、世界の有意義性の語りかけにおいて出会うものを現存在が自らの保護下におくことも、その本質が展開することも困難になるということである。すなわち、中立的な現存在の呼応構造がいくら根源的基礎としてあったとしても、現存在の「ふるまい」がなければ、現存在はそれを実存することが困難なのである。そして、ハイデガーは上の発言に先立って既にボスに向って「あらゆる実存すること、つまり私たちのふるまい (Verhalten) は、必然的に身体的ですが、それだけではありません。確かにそれ自身は身体的です。ただそれに先立って、実存することを世界へのかかわり (Weltbezug) として規定しておかねばならないのです」[ZS, S. 258]と述べている。確かにここでの強調点は実存とは世界へのかかわりであるということであるが、実存することすべてが「ふるまい」と言い換えられた上で、しかもそれが必然的に身体的だとされていることは見逃してはならない。先に『始原諸根拠』では、中立的な現存在の実存は現存在の事実的なものへの「多様化」と理解され、それに「身体性」が「一つの組成化要素」としてかかわっているとされていた。確かに『ツオリコーン』では「世界-内-存在」という

現存在の存在構造に「身体性」が基礎づけられているのを示すことに議論が集中しているが、かといって、ハイデガーが現存在の実存の組成化要素としての「身体性」という見解が廃棄されたわけではなかったのである。

II ハイデガーの「身体性」の問題性格

以上、ハイデガーの「身体性」に注目して、『存在と時間』、『始原諸根拠』、『ツォリコーン』を辿ってきたが、結局、ハイデガーにとって「身体性」の「独自の問題性」とは何だったのか。彼自身の発言によれば、『存在と時間』での「身体性」の困難さは、同書ではまず現存在の「世界-内-存在」の解明が優先されていたということ、また現存在の存在という観点で扱うに値する身体現象の記述を準備できていなかったということだった[本稿序参照]。だが、彼がまさに現存在の「世界-内-存在」から「身体性」を捉えようとしたとき、その議論は或る種の二重性を帯びてしまっている。

とりわけ『ツォリコーン』で顕著だったように、一方でハイデガーの「身体性」の議論は、いかに「身体性」が現存在の「世界-内-存在」によって基礎づけられているかの解明へと向けられている。すなわち、同書においては『存在と時間』で「身体性」との関連が示唆された現存在の空間性の意味を現存在の根源的な「空けること(Einräumen)」へと中立化した上で、その内実を「世界の-開け」からの多様な有意義性の「語りかけ」に対して現存在が「呼応する」という仕方での現存在の「世界-内-存在」構造として示し、そこに現存在の「身体性」も基礎づけられ、境界づけられているとされた[本稿 I-iii 参照]。

しかし、『始原諸根拠』でも「この中立的な現存在は決して実存しているものではない。というのも、現存在はその都度自らの事実的な具体相においてのみ実存する」[GA26, S. 172]と述べられているように、中立的な現存在の「世界-内-存在」における呼応構造を示すだけでは、現存在の

実存を捉えたことにはならない。それゆえ、同書では現存在の事実的な「多様化」ということが主張され、その「一つの組成化要素」としての「身体性」が指摘されていた [本稿 I-ii 参照]。こうした現存在の実存を可能ならしめるような「身体性」は、『ツオリコーン』でも決して廃棄されたわけではなかった。世界の語りかけに対する呼応において現存在はその身体的な「ふるまい (Verhalten)」という仕方では実存することが要請されており、それがなければ現存在は「世界-内-存在」において出会われる世界の多様な有意義性を自らの保護下におくことも、またその本質を展開することも困難となるのである [本稿 I-iii 参照]。それゆえ、確かに中立的な現存在の根源的な空間構造（「空けること」、つまり世界との呼応関係）に基礎づけられて「身体性」が可能になるとはいつても、その根源的な空間性を現存在が実存するには「ふるまい」という仕方では現存在の「身体性」が関与することが要請されているのである。

したがって、現存在の「身体性」に関するハイデガーの議論の二重性とは、彼の議論が一方で現存在の「世界-内-存在」構造に基礎づけられた「身体性」へと向けられ、他方でその「世界-内-存在」に要請される「身体性」（現存在を多様化・実存させる身体性）へと向けられているということである。「身体性」についてのハイデガーの言及のほとんどが前者に関するものであるため、後者の議論は影をひそめているが、そのような彼の言及のかたよりはむしろ後者のような「身体性」に対する彼の困惑を示唆しているのかもしれない。そうであるならば、ハイデガーを困らせた「身体性」に関する「独自の問題性」とは、彼が語ったような単なる議論の優先順位や考察に値する身体現象の記述の準備不足ということ以上に、彼が中立化した現存在の存在構造に「身体性」を基礎づけつつもなお、現存在の実存においてはその組成化要素の一つとして「身体性」を要請せざるをえなかったことであつたのだと言えよう。

III 《ながら》という身体現象

ところで、上で述べたような「身体性」の問題性格は事象的にも見出せる。そこで本稿は最後に、我々にとって非常に日常的な《ながら》という身体現象の考察からそのことを示してみたい。

ツオリコーンでのゼミナールの中で、ハイデガーは参加者との質疑応答を通じて身体と空間の関係を問題提起した後、次のような身体現象への注意を促している。「私が身も心も (mit Leib und Seele) 一つのことにならなくなっているとき、[...] 身体はどこかに離れていってしまいます。しかしこの〈身体が離れている〉(Weg-sein des Leibes) は、何もない(nichts)のではなく、欠如態(Privation)というもつとも秘密に満ちた現象の一つなのです」[ZS, S. 111, 〈 〉は引用者]。後にボスとの対話でこの「欠如態」という語は「身体に注目しない(Nicht-achten auf den Leib)」[ZS, S. 244]と言い換えられている。つまり、没頭中において身体はここにありつつも、それに注意が向けられず「離れている」のである。

ハイデガーはこうした身体現象の例として、哲学者のターレスが考え事をしながら穴に落ちて笑われたというエピソードを挙げている[ZS, S. 111]。そのときターレスは考え事の方に注意を向けていて身体が「離れて」いたのである。だから、つい穴に落ちてしまった。

そして、ハイデガーはこの「身体が離れている」という身体現象から、そこに既に予め含まれていた「世界-内-存在」としての現存在の存在構造をゼミの参加者に示してみせる。彼によれば、上の身体現象は「身体がここにあること (das Hiersein des Leibes)」が、その本質上、常に既に「何かのもとでここにあること (ein Dortsein bei etwas)」をも同時に意味していることを示しているのであって[ZS, S. 127]、このことは「世界-内-存在」である現存在の脱自的性格によって基礎づけられているとされる¹⁰。

また、ハイデガーは「何かのもとでそこにある」ような私の身体がそれでも常に「ここにある」こともやはり現存在の存在構造から基礎づけられていると主張する。彼に従えば、私の身体が「ここにある」と言ってもそれは個々の特定の三次元空間的な位置にあるということではなく、「私はいつでもどこかで (irgendwo) 「ここに」 いる」 [ZS, S. 112] ということの意味しており、それは「私はいつも [或る一つの] 「ここ」 (ein 《Hier》)¹¹ に逗留している (sich aufhalten)」 [ebd.] ということだとされる。それゆえ、私のその都度特定のここ (hier) にいるというのは、現存在としての私が「存在地平 (Seinshorizont)」 [ZS, S. 113] の内で逗留していることに基礎づけられて可能となるのであり、私の身体の境界もこの逗留の及ぶ範囲で定められているとされる [ebd.]。

したがって、没頭時の「身体が離れている」という身体現象が含む、「ここにある」とともに「何かのもとでそこにある」ような身体は、現存在が「存在地平」の内に逗留しつつ脱自的存在であるという「世界-内-存在」の構造に基礎づけられていることになる。このように「身体性」および「身体」を「世界-内-存在」に基礎づけられたものとみなすハイデガーの立場が『ツオリコーン』に一貫してみられるものであることは既に指摘したとおりである。だが、彼のそうした立場ゆえに、なぜ現存在の「存在地平」の内での逗留においてその都度特定のこの「ここ」に事実的に実存しているのかという問いは触れられないままである。仮に、事実的に実存する現存在が特定のこの「ここ」にあることの可能性の条件として、そもそも現存在が既に「存在地平」の内の逗留という存在構造をしていることを認めたとしても、この逗留は事実的に実存する現存在が特定の「ここ」にありうる可能性の最大範囲を規定するだけで、なぜその範囲内で現存在が様々な「ここ」へと「多様化」しているのかまでは規定することができない。やはり、「多様化」の問題が『ツオリコーン』のハイデガーにとっては急所となっているのである。

しかも、こうした現存在の様々な「ここ」への「多様化」が、ハイデガーの取り上げた没頭時の身体現象に既に含まれてしまっていることが、その現象を彼とは異なる視点で捉えることで指摘できよう。ハイデガーはターレスが考え事をしながら穴に落ちたことを挙げて、その身体現象の「身体が離れている」、つまり「身体に注意が向けられていない」という側面に注目し、上のように議論を展開した。だが、本当に「身体に注意が向けられていない」のだろうか。ターレスは確かに穴に落ちたかもしれないが、何も歩けなかったわけではない。ターレスは身体に注意を向けていなかったかもしれないが、それでも身体的でありつづけた（歩き続けた）のである。穴に落ちたのはたまたまにすぎない。

ターレスでなくとも、我々もまた自らの身体に注意を向けずに何かに没頭することは日常茶飯事である。例えば、この原稿を書くのに行き詰った私はとりあえず煙草に火をつけ、原稿内容をあれこれ思案しながら、煙をふかしてその場をうろうろ歩き回る。私は思索に集中している。だが、灰をこぼすこともなければ、壁にもぶつからないし転ぶこともない。各々の身体動作はつつがなく成立してしまっているのである。私が何か別のことに集中しながらも、身体をつつがなく動かしてしまっているというのはどうということなのか。この《何か別のことに集中しながら》という仕方であつがなく成立している私の身体的な実存はいったい何を示しているのか。

それは、私は考え事をしながらも、煙草や灰皿や壁や床などを三次元空間的に認知し、それぞれの座標位置を確定し、自分自身もその中で適切な座標位置を保ち続けているということではない。私はそんなことをしてはいない。それは物的運動の説明であって、私は思索に集中しながら身体を物体 (Körper) と化しているわけではなく、《ながら》でありつつも身体は私の身体であり、「身体を生きている (Leiben)」。ハイデガーによれば、この「身体存在」は「世界-内-存在」としての現存在の存在構造、つまり「世界の-開け」と現存在との応答構造に基礎づけられていることになる

が、そのように基礎を示しただけでは《ながら》の身体現象を語りきったことにならない。

別のことに集中しながらも私の身体動作がつつがなく成立しているということが示しているのは、そのとき様々な用具的なものとの私の配慮的交渉がその身体的なふるまいにおいてそれぞれ支障なく成立しているということである。もし、配慮的交渉に何らかの障害が生ずれば、私は自らの身体に注意を向けるようになるだろう。ターレスは穴に落ちたとき、自らの身体に注意を向けたであろうし、私は煙草の灰が手にかかればそれを払う。つまり、何か別のことに集中しているときに「身体に注意を向けない」でいられるためには、それに先立って既に私の様々な身体的なふるまいがつつがなく遂行されていなければならない。

また、私がそれに注意を向けなくて《ながら》という仕方ですべて遂行してしまっている身体的なふるまいは様々な多様である。原稿内容の思索に集中しながらも、私はそれを吸うことで煙草にかかわっているし、それを歩くことで床ともかかわっている。『存在と時間』でハイデガーは現存在が用具的なものへの配慮的交渉においてそのものと自らとを「布置」していると述べたが〔本稿 I-i 参照〕。そのような「布置」が《ながら》においては多様に、そして同時多発的になされてしまっている。私という実存者の中立化としての現存在はその「世界-内-存在」という構造において、それらの「布置」すべてを一括して基礎づけてはいるが、私はそれを実存することにおいてそれらの個々の「布置」すべてに「多様化」されてしまっている。私は《ながら》という仕方ですべて既に、煙草とそれを持つ私の手とそれを吸う私の口、床とそこを歩く私の足などをそれぞれ同時多発的に「布置」してしまっており、その蜘蛛の巣のように諸々に張り巡らされた配慮的交渉の収束するところに私の身体の《このここ》を定位させているのである。

だが、私は多様な動作を《ながら》しつつも、自らの身体をバラバラに

分裂させているわけではない。私は思索に集中しながら、煙草を吸いながら、うろうろ歩き回っているが、仮に何かに躓いたとすればその思索も喫煙もまた妨げられる。思索をめぐるすことと、煙草を吸う手と口と、床を歩く足とは、それぞれ多様に「布置」されているが、個々に切り離されているわけではなく、私の実存を基礎づける現存在の構造によって一括して支えられることで、多様な《ながら》として相互に連動している。つまり、私の身体における多発的な多様化は決して私の身体の複数化ではない。

このように、ハイデガーが取り上げた没頭時の身体現象は、彼がゼミナール参加者に語って見せたように《「世界-内-存在」構造に基礎づけられる身体性》を示すだけでなく、その《ながら》という点において《現存在を多様化させ、実存させる身体性》をも示している。それゆえ、この《ながら》という身体現象は、「身体性」についてのハイデガーの二重の議論を同時に際立たせるような、つまり、現存在の「世界-内-存在」を基礎にしつつもなお「身体性」に現存在の多様化の「組成化要素」を見出せるような道となりうるのではないだろうか。しかしながら、ハイデガーを悩ませたと思われる《現存在を多様化させ、実存させる身体性》の内実を解明するためには、さらに広範にわたって彼の思想を辿る作業が必要であるため¹²、本稿は彼の「身体性」の問題性格とそれを際立たせる《ながら》の身体現象を指摘するにとどめ、終わりとする。

註

1. ハイデガーの現存在分析における「身体性」の解明の欠落という批判は、既述のサルトルだけでなく、J. デリダや、近いところでは D. Franck, D. F. Krell, H. Dreyfus, D. R. Cerbone, J. Greisch などにもみられるが、本稿ではさしあたってハイデガー自身のテキストから改めて彼の「身体性」の問題性格を浮かび上がらせることを目的とする。また、本稿はハイデガーが「身体性」について多くを語っているにもかかわらず、先の批評者があまり取り

- 上げていない『ツォリコーン・ゼミナール』を積極的に考察の視野に入れている。
2. 「世界-内-存在」という根本体制をもつ現存在がかかわっているその「世界」の世界性は、われわれが最も親しくかかわっている「環世界(Umwelt)」の「有意義性(Bedeutsamkeit)の指示関係の全体」[SuZ, S. 123]である。「有意義性」とは、用具的なものが「…のために(Um-zu)」といったような仕方に関係し合うその指示連関の全体のことである[ZuS, S. 87].
 3. ハイデガーの例に敷衍して言えば、熱心に絵を見ている人にとっては自分の鼻の上にある眼鏡よりも壁にかかっている絵の方がより「近い」ということである[SuZ, S. 107].
 4. 「配慮 Besorgen」とは、現存在一般を性格づける「関心 Sorge」の一つとして主に用具的なものに携わる交渉に対してハイデガーが用いる語である。他に人間関係としての交際には「待遇(Fürsorge)」と名づけている[SuZ, S. 121]. ちなみに本稿の叙述で既に用いた「配視 Umsicht」とは、用具的なものとの交渉においてその「…のために(Um-zu)」に目を配る見方のことである[SuZ, S. 69].
 5. 「この距離を-除くこと、つまり現存在自身からの用具的なものの遠さを、現存在は決して横切つて渡る(kreuzen)ことができない」[SuZ, S. 108]
 6. ハイデガーによれば、「環世界」のさまざまな「方面」を中性化することで、つまり用具的な配視的配慮を欠いたただ注視するだけの態度で眺めることで、世界はその「環性(das Umhafte)」を喪失し(「非世界化 Entweltlichung」)、「同質的な自然空間」に至るとされる。
 7. ハイデガーにおける“Tatsächlichkeit”あるいは“tatsächlich”と、“Faktizität”あるいは“faktisch”との区別については[SuZ, S. 56]を参照。前者が客体的に対象化された存在者の諸事実に対して用いられる「カテゴリー」であるのに対して、後者は現存在の「実存範疇」であるとされている。また、本稿が以下「事實的」というときはすべて後者の意味である。
 8. 「身体性」は現存在の多様化の組成化要素の一つであって、ハイデガーは他にも「歴史性(Geschichtlichkeit)」の関与を示唆している[GA26, S. 173].
 9. ハイデガーは同様の主張をボスとの対話の中でも述べている。「身体であること(Leiben)はそれ自体、世界-内-存在に属しています。しかし世界-内-存在は身体であることだけではありません」[ZS, S. 244].
 10. ハイデガーは他にも我々の「身振り Gebärde」が既に常に、我々が世界の内で出会ってそれとかかわっているもの(事物や他者など)を通して開かれたある一定の「方面 Gegend」へ向けてなされることから、身体性の脱自的

- 性格を指摘している [ZS, S. 118].
11. ここでハイデガーが“Hier”と大文字とした上で「一つの」という意味合いを含む“ein”という不定冠詞を用いていることには注意すべきであろう。その後すぐ述べているようにこの“ein (Hier)”とは「存在地平 (Seinshorizont)」のことである。それゆえ、この“ein”は「存在地平」が含む、その他をもたない固有な唯一性を示唆しているように思われる。
 12. 例えば、現存在の多様化は現存在の事実性 (Faktizität) にかかわる問題でもある。そして、『存在と時間』において、現存在の事実性の開示は「情態性 (Befindlichkeit)」を通じての「被投性 (Geworfenheit)」の開示として理解された [SuZ, §29]。それを踏まえ、『始原諸根拠』でも「このような中立的現存在の形而上学的本質に属するような超越論的分散は、[...] 現存在の根源的な性格の一つである被投性に基づいている」 [GA26, S. 174] と述べられている。それゆえ、現存在の身体性への多様化は、現存在の身体性を現存在の空間性の問題としてだけでなく、現存在の情態性の問題としても扱うことができるだろう。

参 考 文 献

※引用に際しては邦訳を参照したが、基本的には私訳である。

- SuZ ……M. Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 18 Aufl., 2001. [邦訳『存在と時間 上・下』, 細谷貞雄訳, ちくま学術文庫 1994]
- GA26 ……M. Heidegger, *Gesamtausgabe, Bd. 26, Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz.*, hrsg. v. Klaus Held, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 1978. [邦訳『論理学の形而上学的な始原諸根拠・ハイデッガー全集 第26巻』, 酒井潔・ヴィル・クルンカー訳, 創文社 2002]
- ZS ……M. Heidegger, *Zollikoner Seminare: Protokolle-Zwiesgespräche-Briefe*, hrsg. M. Boss, Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 2 Aufl., 1994. [邦訳『ツォリコーン・ゼミナール』, 木村敏・村本詔司 共訳, みすず書房 1991]